Special Feature 2

石村亭に見る「誠実・信頼・永いお付き合い」

文豪・谷崎潤一郎が暮らし、名作「夢の浮橋」の舞台にもなった石村亭。行動の原点「誠実・信頼・永いお付き合い」を体現するように、1956年に譲り受けてから60年間、当時の趣や佇まいを変えずに保存してきました。

「この佇まいを維持してほしい」――文豪の愛した邸

下鴨は糺の森に面した邸宅「石村亭（せきそんてい）」。明治末期から昭和初期にかけて流行した近代数寄屋建築の母屋と美しい日本庭園が特徴で、築100年を越えます。生涯40回以上転居したことで有名な文豪・谷崎潤一郎は、この邸を「潺湲亭（せんかんてい）」と名付けてこよなく愛しました。そして、1949年から7年もの歳月をここで過ごし、「潤一郎新訳源氏物語」「少将滋幹の母」「鍵」などの作品を生み出しました。

谷崎婦人と縁のあった当社は、谷崎が1956年に熱海へ移り住む時、「京都を訪れた際には見に行きたいので、現状のまま使ってほしい」との条件付きで、この邸を接待寮として譲り受けました。そして今日に至るまで、譲渡時に谷崎自らが名付け直した「石村亭」を、その約束通り大切に守り続けてきました。

2016年7月に日本文化研究の第一人者であり谷崎の友人でもあるドナルド・キーン氏が訪れた際にも、その文化的価値を守り抜く姿勢を高く評価されました。

潺湲亭（現：石村亭）で過ごす当時の谷崎（撮影／増田 実）

Special Feature 2

石村亭に見る「誠実・信頼・永いお付き合い」

文化的資産の保存と活用

60年前の趣を維持しながら、かつての文豪の姿を社会に伝えています。

谷崎が長らく住まい、執筆活動をしてきた文化的資産として、趣や佇まいを変えないよう、維持保存活動に努めています。近年では、当時の様子や庭の調査を行い、築100年となる母屋の修理や、庭の修繕を行いました。平安朝好みの谷崎が気に入っていた御殿風の母屋は瓦を葺き替えてその優雅な佇まいを維持し、庭は変化に富んだ多くの庭石を楽しめる、石村亭の名にふさわしい姿を残しています。

通常は非公開ですが、日本文学や建物・庭に関する研究を行う団体の見学のほか、新聞・雑誌・テレビなどの取材を受け入れることで、かつての文豪の姿を社会に伝えることに貢献しています。

谷崎との約束を「誠実」に守り、保存と活用を通じて、社会から「信頼」される企業として、当社の誇りである石村亭をこれからも守り続けます。

母屋と中庭

「石村亭は、かつて私が谷崎先生を訪ねたときと変わらない姿で私を迎えてくれました。それは日新電機さんが大変大切に管理保存してくださっているからです。会社の経営が困難になったときも、会社の誇りとして手放さなかったとお聞きして感心しました。古きよき文化、そして大作家・谷崎潤一郎の京都の住居として維持されていくことは非常に重要なことです。」

『和樂』2016年10／11月号P／148（小学館）
（撮影／伊藤信）

ドナルド・キーン氏

1922年、ニューヨーク生まれ。コロンビア大学名誉教授。日本文学と日本文化研究の第一人者。1953年から2年間、京都大学大学院への留学中に、潺湲亭（現：石村亭）に住む谷崎夫妻と交流を持った。欧米に日本文化を数多く紹介した業績は高く評価され、2002年には文化功労者に選ばれ、2008年に文化勲章を受章。2012年に日本国籍を取得。

母屋玄関

初版本のコレクション

書斎の東側の応接間。当時のテーブルと椅子

Column 小説「夢の浮橋」で描かれる石村亭

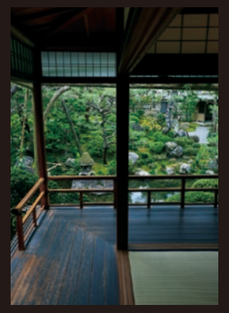
「夢の浮橋」は右手が不自由になった谷崎が初めて口述筆記で著した小説であり、谷崎文学における母恋物語の代表作。

主人公・糺（ただす）の住居「五位庵」として石村亭が登場しており、庭や部屋の佇まいが生き生きと表現されている。4枚の挿絵に描かれた当時の石村亭の風景は、今も変わらず目にすることができる。

> 庵は太い二本の杉丸太の正門を這入（はい）ると、石甃（いしだたみ）の路次の奥にもう一つ中門があった。路次の両側にはさゝやかな竹が植わってい、朝鮮から運んで来たらしい李朝の官人の石像が二つ相対していた。中門は杉皮を檜肌葺（ひわだぶき）のように葺いた屋根があって、こゝの門は常にとざされていた。
> 〈小説「夢の浮橋」（中公文庫）より〉

（表紙板画／棟方志功）

（挿絵／田村孝之介）



挿絵に描かれた主室の縁側

挿絵に描かれた中門

（挿絵／田村孝之介）

路次の「李朝の官人の石像」